

オレンジカフェ静岡

認知症の情報交換・予防
相談ができるカフェ

毎月第三日曜日

12/17 2時~4時

飲み物・お菓子
各100円

ミニ講話

静岡の戦災孤児と 鐘の鳴る丘

小島孝子（臨床心理士）

戦災孤児の調査は、敗戦から二年半が経って、やっと全国的に行われました。その数は、満州からの引き揚げ孤児約一万一千人を含めて、十二万四千人と報告されています。（厚生省児童局企画課調。）沖縄はアメリカの直接統治下にあり、統計には入っていません。

一般市民の死者も正確な数が分からない時代ですから、実際の孤児はこの調査で把握した数字以上だったのではないのでしょうか。

孤児収容のために全国に作られた施設は二百八十ヶ所、七千六百人の孤児を収容しました。この内、公営の施設はわずかに四十ヶ所で、一千六百人です。誰もが生き延びるために必死の時代でしたが、孤児たちの施設を作り、面倒を見たのは主に民間人だったことが分かります。心が温まります。

一方、収容されない、また収容されるのを拒否した多くの孤児たちは、その後どのような人生を歩んだのでしょうか。当時の新聞には戦後二年目の「元旦から七日までに上野駅地下道で十一人の孤児が凍死した」（朝日、昭和二十二年一月九日）と報じられています。

その上野駅地下道で、同じ時に、今回お話する静岡の戦災孤児の一人、品川房二（十二歳）が仲間と靴磨きをしていました。彼は自由で幸せな孤児たちの家を作ろうとした品川博に従って、浜松の孤児収容施設を去った五人のうちの一人でした。彼らは、当時始まったラジオ放送「鐘の鳴る丘」を聞き、憧れたのです。実は「鐘の鳴る丘」は菊田一夫が創作した話で、事実ではなかったのです・・・



空襲で焼け野原になった静岡市内（遠くは浅間山）

静岡市葵区新富町周辺（山梨写真館）

12月のイベント



上藤美紀代による 声のワークショップ

先日、ある社会福祉法人の施設で、職員研修の講師を務めて参りました。70代半ばと思いき理事長が、率先して最前列で受講。終了後には、「年齢を重ねて声は出にくくなるし、口も思うようには動かなくなって気持ちが沈んでいたけれど、このトレーニングを毎日やれば、また元気に話せるようになりそうだ！何か新しいことにチャレンジできそうだなあ！」と笑っていらっしゃいました。今月も皆さんと一緒に、声を出して“前向きに”なりましょう！前回に続き、「のどを鍛える」トレーニングも行います。

ヴォイストレーニング

元 SBS アナウンサー 上藤美紀代さん

最後に合唱しましょう

元パパさんコーラス指揮者

松永好夫さんの指揮と

アコーディオン伴奏

(一面からの続き)
彼らは上野駅地下道、後には前橋駅前で靴磨きをして生活費を稼ぎ、資金を貯め、ついに鐘の鳴る丘の上に、自分たちの目指す「とんがり帽子の赤い屋根」がある家を作りました。その後、品川房二は三年間浪人して医大に入学し、医者になりました。晩年の品川房二について、児玉隆也は次のように書いています。
「品川房二は雨あがりの道を東京に帰った。靴が汚れた。今夜、医学博士・品川房二は、その靴を磨くだろう。彼は、靴だけはいまだに一度も他人に磨かせたことがない。家族の靴も自分で磨く。昔、彼はそれ



鐘の鳴る丘の家 群馬県前橋市

で生きた。今、それは、彼の人生を塗り込めた余技になっている。」

(『この三十年の日本人』新潮社、第九刷、昭和五十一年)

会場 静岡市葵区城東町 34-14

城東コミュニティプラザ HapiSpo

会場提供

社会福祉法人 静和会

主催 特定非営利活動法人
ヒューマン・ケア支援機構

連絡先 ☎ 090-5620-6070

✉ orange@npo-humancare.jp



※駐車場有ります

バスでお越しの場合、静岡駅北口5番、6番発の全てのバスがご利用可「巴町」下車 徒歩8分